

MOCHIZUKI OUTDOOR TOOLS

BACKCOUNTRY RESEARCH

WINTER 2022/2023

backcountry-research.jp



〒955-0093 新潟県三条市下須頃323番地 TEL.0256-32-0819(代) FAX.0256-32-0880 www.e-mot.co.jp

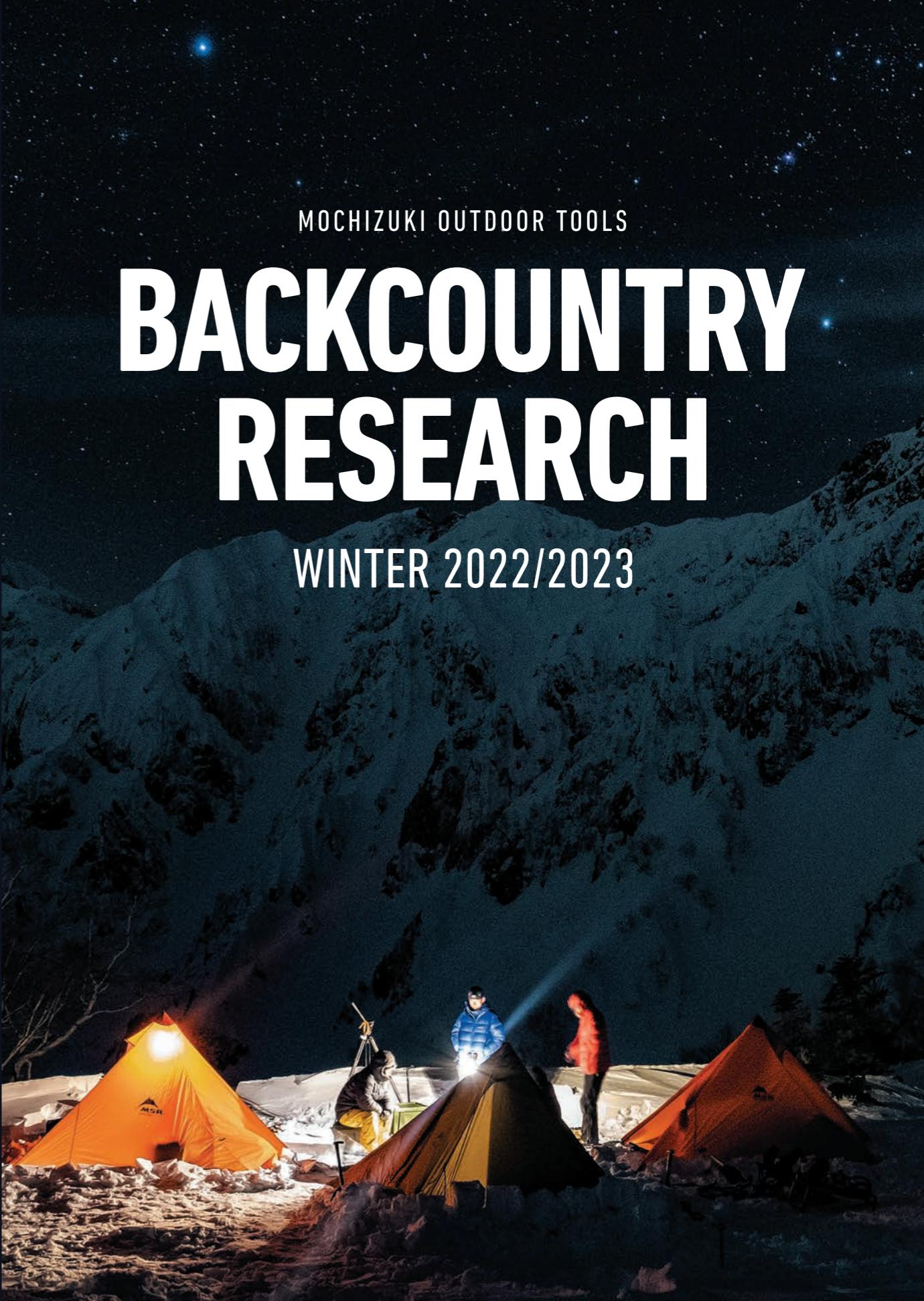
[ユーザーサポートダイヤル] TEL.0256-32-0860 受付時間: 平日午前9時30分から午後5時30分まで E-mail info@e-mot.co.jp

このカタログに記載されている商品の仕様、デザイン、価格等は、予告なく変更する場合があります。商品の写真は印刷物のため実際のカラーとは若干異なることがあります。

MOCHIZUKI OUTDOOR TOOLS

BACKCOUNTRY RESEARCH

WINTER 2022/2023





MOCHZUKI OUTDOOR TOOLS
BACKCOUNTRY RESEARCH
WINTER 2022/2023

CONTENTS

- 04 — HighCamp with Sherpa
- 14 — スノーシュ一日和
- 22 — スノーボード・ゾンビーズの雪上キャンプ
- 28 — D or T ? / SHOVEL TOPICS
- 29 — Which one is best for YOU ? / SLEEPING BAG TOPICS
- 30 — GEAR TOPICS
- 32 — 人類未到のルートで南極点を目指した冒険家・阿部雅龍の歩み

ABOUT BACKCOUNTRY RESEARCH

MSRをはじめとする多くのアウトドアギアを取り扱うメーカー「モチヅキ」から発信する、ギア・レポート・メディアです。バックカントリーでの実践から生まれた、信頼に足るフィードバックをお届けします。winterバージョンの紙メディアでは、ギアが必須となるエクスペディションを中心としたストーリーを掲載し、使用したいいくつかのギアの詳細はQRコードでWEBサイトとリンクしています。紙とWEB、双方の特性を活かした多角的なレポートをお楽しみください。

BACKCOUNTRY RESEARCH
WEBSITE
backcountry-research.jp



Cover Photo: Tsutomu Endo
Contents Page Photo: Gaku Harada



STORY 01

HighCamp with Sherpa

ギアの温もりにサポートされた上空への旅

Photo & Text: Tsutomu Endo



歩荷チーム。

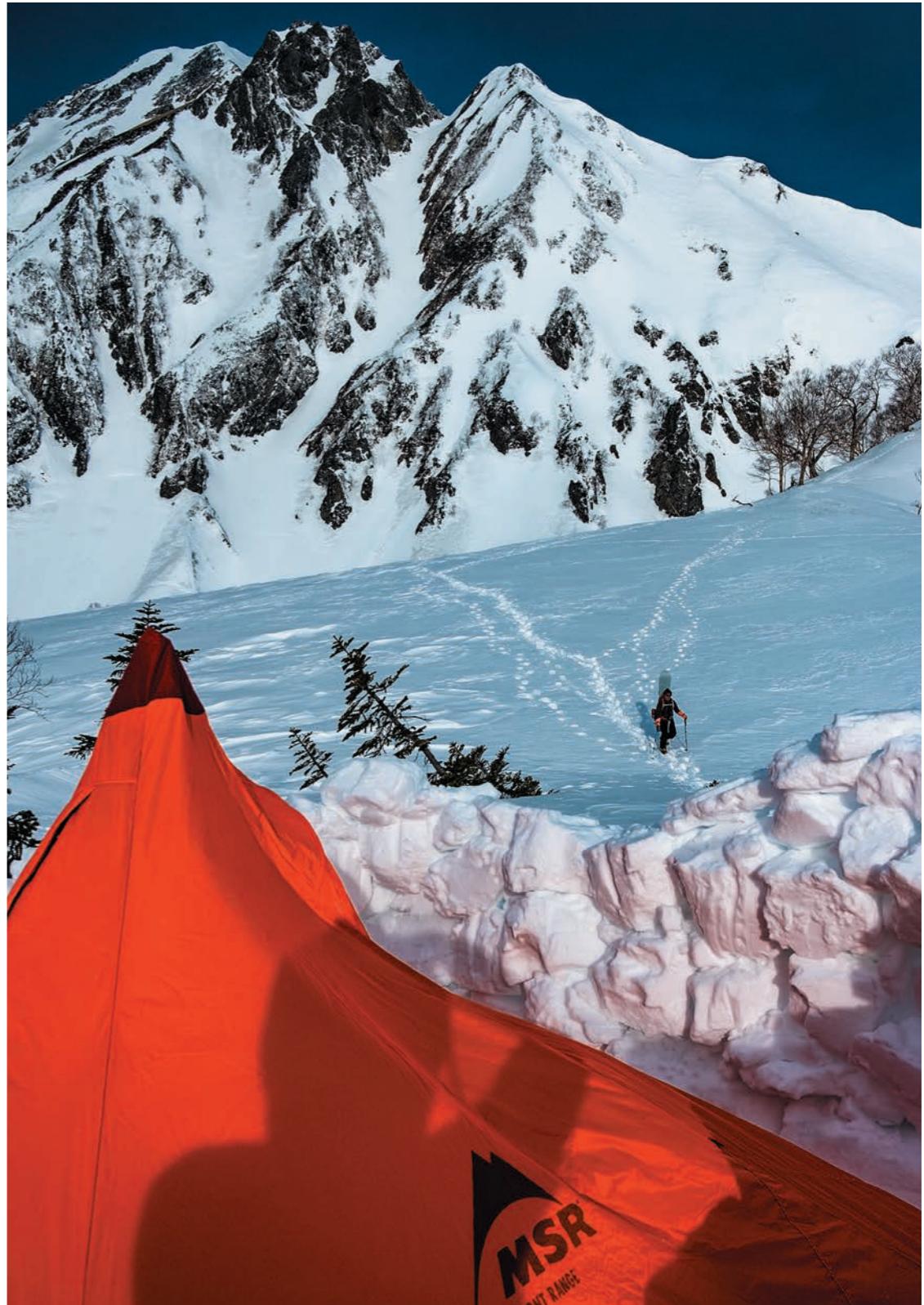
北アルプスの麓に育ち、90年代よりプレイヤーとしてもこの恵まれたフィールドで冒険と開拓を続けてきた私は、2021年にこのエリアの同志たちとある試みをおこなった。それはこれまでになかった試みで、日本の山岳地方に古くから根付いてきた歩荷と、近代に登場した我々スノーボーダーとのコラボレーションだった。そして「上空への旅に出る」という、ちょっとラグジュアリーで三次元地図の旅をコンセプトに、北アルプス上空にベースキャンプを構えてバックカントリー スノーボーディングとその撮影に挑んだ。

私は以前から北極遠征をおこなっている経緯があり、冒険家の遠征手段やプロリーグのあり方についても考えることがある。平たく言えば、2021年当時の試みは「それぞれのエキスペートが持ち場を分業しながらひとつのゴールを叶える」ということ。それを北アルプスでトライしたのだ。

その企画とコンセプトの提案者として、フィールドの選択、人選から遠征ギアのチョイス、食事のメニューまで、プロジェクトに

関わる重要な選択を責任持って担当させてもらった。危険を孕むフィールドでのクルーの停滞には、もちろん信頼のおけるギアが必須となる。そのため生活面で長年愛用し、北極遠征にも欠かせないMSRとサーマレストから上空への旅にもっとも適したギアを共有させてもらった。

スノーボーダー2名とフィルマー1名、スチールを担当する私と歩荷3名の合計7名がプロジェクトメンバー。ベースキャンプの標高はおよそ2,500m。これまでの経験からハイク時間と体力、数日分の食料やキャンプギアの重量を計算しながら慎重に選んだ。中でもベースキャンプにはMSRの「フロントレンジ」を3張り採用。コンパクトな収納と超軽量であること、高さを備えた室内空間に底面シートが無いことから根拠地としての使い勝手がいい。底面が雪上ということで雪にまみれたウエアとスノーブーツを履いたまでの出入りや休憩、コーヒーやスープなど汁物の扱いにも気を使わないワイルドな居心地を提供してくれる。



シュートを滑走した帰路。/ Yuta Kobayashi



歩荷チームが食事を担当。



ストームによる停滯も快適に過ごすことができた。/ Takashi Minamiura & Yuta Kobayashi



直接雪上に敷いても冷えを感じることはない。

また、食事はクルーの気持ちを繋ぐ美味しい手作り食を心がけ、安定した火力と細やかな火力調整を兼ね備えたガソリンストーブの「ドラゴンフライ」を採用した。毎日大量に必要となる7人分の雪を溶かす水作りには、極寒状況でも耐えうる「XGK-EX」、一時的にブーツを温めたりするような緊急時の使用にはコンパクトで扱い容易なガスストーブ「ポケットロケット2」を備えた。停滯中には暴風雪に見舞われる想定内の場面もあったが、緊急用にとあらかじめ歩荷隊が準備してくれていた雪洞の中で、雪上に敷いた「ネオエアーエキスパート」と「ポーラーレンジャー」という暖かな装備で一夜を明かした。

ガイドとレスキューのノウハウを持ち合わせた歩荷隊を交えることで、我々にかかる重量や心理的な負担は軽減され、修行のようなハイクや、大きな荷物を背負ったガチガチの下山的な滑走ではなくなり、より自由なスノーボーディングとシューティングが実現した。さらに上空でちょっと贅沢な飯を食べながら、停滯そのものを優雅な気分で過ごさせてもらうことができたのだ。

雪山が好きという共通項のもと、各分野のエキスパートらと新しい挑戦を叶えた喜びは大きく、歩荷との連携からはそれまで不可能に思えたフィールドへの旅が広がった。そしてこの試みが、次の誰かの挑戦や楽しみを叶えるヒントに繋がってくれれば、それこそが私にとって本当のゴールとなるのだ。

この時の本ストーリーは2021年発売の
『DIGGIN' MAGAZINE ISSUE16』に掲載
また映像コンテンツはこちら▶ 

遠藤勲：長野県大町市出身の写真家。スノーボードカルチャーに精通し90年代より世界の雪山やコミュニティを訪れその潮流を撮影。また、アーティストとして雪の作品表現に傾向し、近年は北極圏に通い失われつつある自然環境や先住民族の暮らしをカメラに収め続けている。作品集に「inner focus」、「Vision quest」がある。



Yuta Kobayashi

GEAR**THERM-A-REST****ネオエアーXサーモ**

レギュラーサイズ
重量:430g
サイズ:51×183cm
収納サイズ:23×10cm
R値:6.9
厚さ:6.4cm
¥35,200(税込)

遠藤さんが北極遠征時でも使用する、ネオエアーシリーズで最も断熱性が高いマットレスです。三角形のチューブを互い違いに重ねてコールドスポットをなくすトライアングュラーコアマトリックスと、マットレス内部に熱反射板をはさみ込むサーマキャップチャーテクノロジーを採用しています。4枚のサーマキャップチャー層(熱反射板)が、地面からの冷気を防ぐと同時に体から出る熱を反射、細かく区切られたチューブの中に温かい空気を閉じ込めます。表側にはソフトで肌触りがよく、滑りにくい生地を配しました。寝返りを打ったときの生地音も少なく、快適な眠りが得られます。幅の広いRWが登場。スタッフサック、ポンプサック、リペアキットが標準装備です。



THERMAREST
マットレスの詳細はこちら▶

**GEAR****MSR****フロントレンジ**

定員:4人 / 総重量:910g / 収納サイズ:30×13cm / ¥57,200(税込)

超コンパクトかつ、超軽量のフロントレンジタープシェルターは、ウルトラライトトレッキングから、バックカントリースキー やスノーボードまで、その特徴を活かして様々なアクティビティをサポートします。今回のような厳冬期の雪上ハイキャンプでは、クルーのベーステントとして活躍し、専用のインサートを使用すれば通常のテントとしても活用できます。その使い方の幅は非常に広く、あらゆる環境、季節に対応できるエクストリームシールドシステムを採用したこのタープは、他の追従を許しません。なお、専用ポールは付属していませんので、ご自分のトレッキングポール、もしくはバックカントリーポールをご使用下さい。



MSR
テント
の詳細はこちら▶

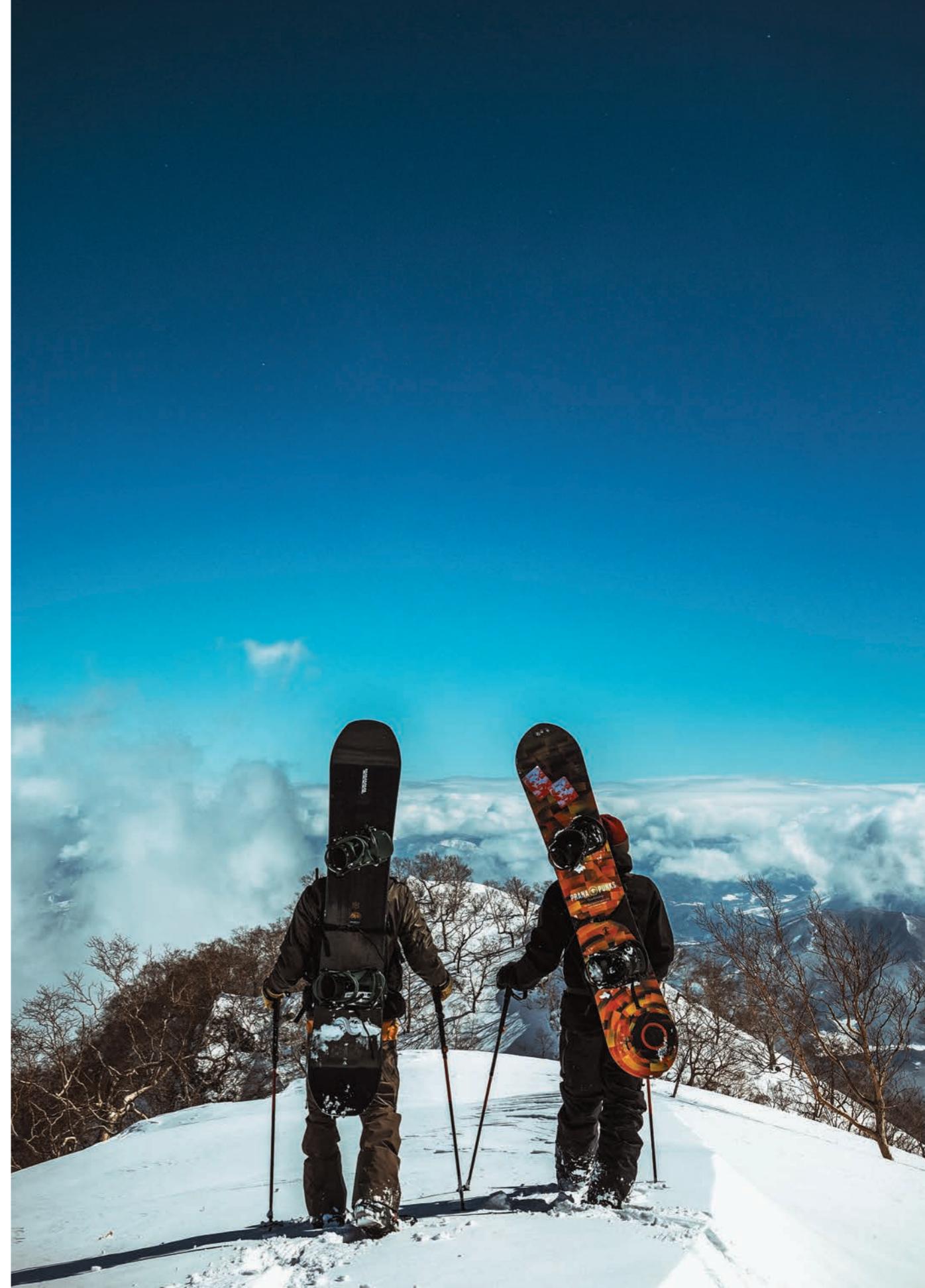
STORY 02

スノーシュー日和

この日、僕らがスノーシューを選んだ理由

Photo & Text: Gaku Harada

厳冬期における滑走目的の山行には、
スプリットボードとスノーシュー、
状況によってはそれ以外というハイクアップのためのツール選択が必要になる。
2人のスノーボーダーと、
ひとりのスノーボードフォトグラファーが過ごした昨冬のとある日。
彼らはスノーシューを選択して山へ入った。
その理由に触れてみる。





新潟・妙高ローカルのハッサーにとっては勝手知ったるフィールドだ。/ Takaoki Hashimoto

スノーシュー？スプリット？それとも？

先の冬はコンスタントな降雪と冷え込みだった。久しぶりの大雪シーズンだったけど、3月に入ると雪もあまり降らず気温も上昇気味。先行するスノーボーダーの橋本貴興（ハッシー）と吉田勇童の足跡を辿りながら、それほど雪に沈まなくなったスノーシューの感覚を足下で感じつつシーズンを振り返っていた。

厳冬期の僕は、スノーシューにオプションのテールを装着して撮影に臨むことが常になっている。撮影機材もあるので、深雪をハイクしていると他者より確実に沈む。僕の後ろを歩く人は踏み固まっているので楽だろうが、自分はまあんどい。だからテールを付けて浮力を稼ぐことにしている。

スプリットボードという選択肢もあるけど、機材とギアの進化もあって背中にボードやスノーシューを背負っていても今はさほど気にならない。なにより滑走時に乗り慣れたソリッドボードを選べることが大きい。スプリットボードの性能も飛躍的に上がっているから、ソリッドの滑走感覚に近づいてはいるのだけど。

道具の選択は目的によって変わるのは違いないが、肝心なのは、その日行動を共にする仲間と、どこをどう登って滑って帰ってくるのか、という点だ。

「明日はシュー？スプリット？それとも？」

前日、僕は2人にそれぞれ質問していた。山に入る前の会話の中でも頻度としてはベストワンの文句であり、登りと滑りのルート、雪の降り方や付き具合、何を持っていくかなど、細かなすり合わせのためのイントロでもある。

勇童の意見はこうだ。

「あまり知らない山域の急登だし、最近降った雪もおそらく落ち着いてるだろうから、他のメンツがスプリットならスプリットで行くけど、できればソリッドボードとシューで行きたいかな。ガクさんもシューでしょ？みんなで揃えた方が良いっすもんね」
各々考えがあるから選択は自由だけど、お互い所有している道具の情報を共有していることもあって、会話は意外とスムーズでこんな感じだ。

その後、ハッシーとも連絡を取った。

「シューでいいんじゃないかな。撮影ってこともあるんけど、明日は風あるし、久しぶりに冷え込みそうだからトラブルあつたら嫌やしね。みんな道具揃えて行った方がええんちゃう？それに、ガクちゃんスプリットないやん！」

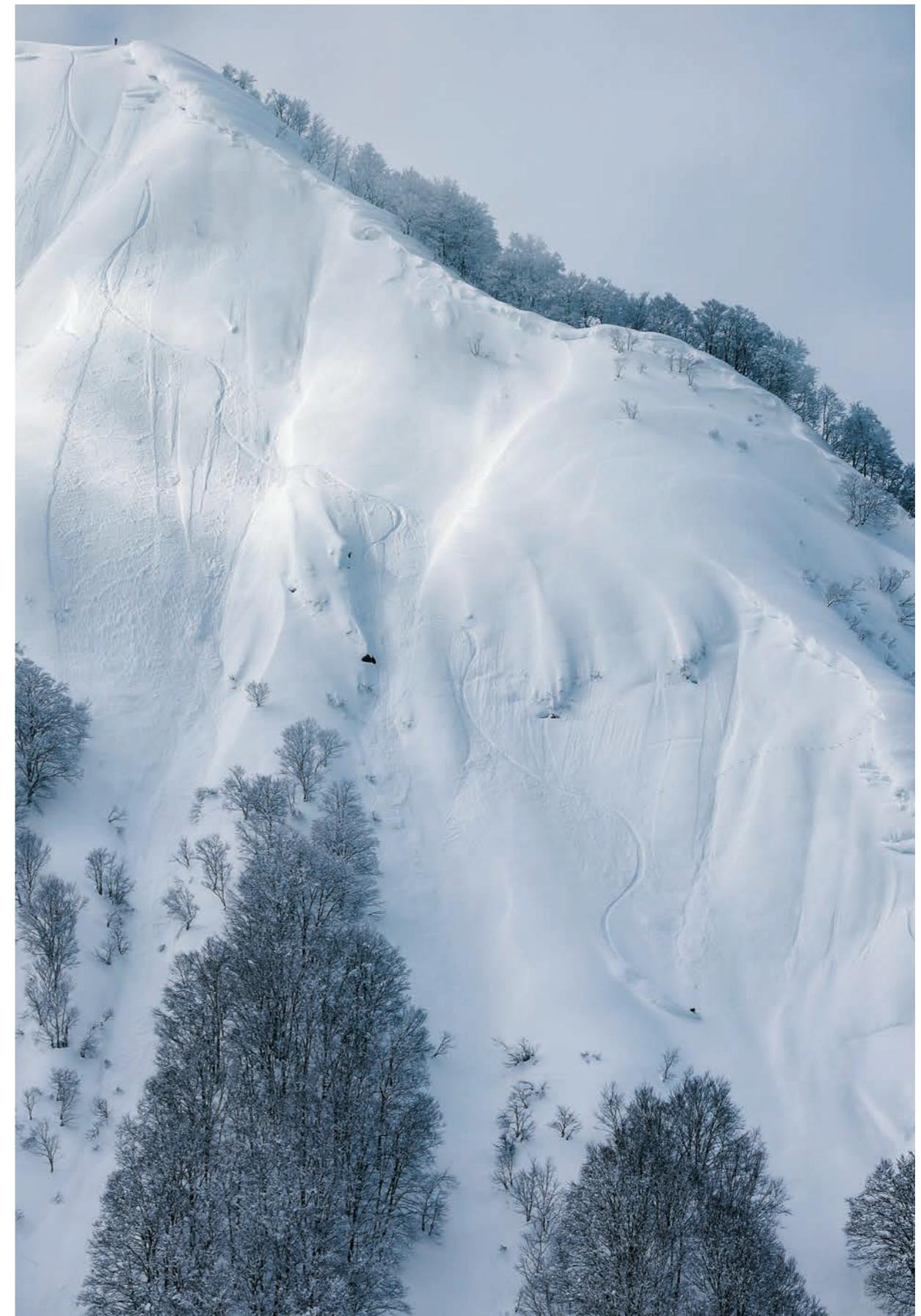
そう、僕は現在スプリットを所有していない。聞いておきながらすんません。何年も撮影山行を共にしているハッシーとは、昔からスプリットとスノーシュー、互いに違う道具で山へ入ることは少なくない。それはロケーションを把握しているからだけど、少し冒険的だった新潟・火打山周辺の山行時には苦い思い出がある。ひと通り滑った後の登り返しが足並みを合わせられないほど厳しい地形で、アイテムの違いでこうもハイクルートが変わるのが、と分からされた日でもあった。挙げ句、稜線へ出る手前で僕はまあまあのサイズの雪庇下に、ハッシーは少し離れた場所でうっすら積もった新雪下のアイスに絡まれて互いに苦戦した。同じルートで登れていれば助け合うこともできたけど、さすがにその時は手詰まり。なんとか雪庇を崩したり、腕を雪面へ差し込んだりして這いつぶたって稜線へ出た経験から、前述のすり合わせはより繊細になったわけだ。

ハッシーは続けた。

「まあ明日は写真やし、いい動きができるソリッドボードで行こうかな。勇童とはスケートボードではあるけどスノーボードと一緒に撮影すんの初めてやし、彼もシューならみんなで足並み揃えて行った方がいいんちゃう？」

こうしてスノーシューのセットアップで行くことが決まった。僕のスプリットレスが理由じゃない……はずだ。

原田岳：ルーツは東京下町戸越エリアの写心家。現在は長野北信をベースに日本国内を愛犬のホワイトシェバード“シャカ”と共に東弄西走し写心活動を続ける人見知りで利き目は左のフォトグラファー。作品集に「Make Peace Lab.」がある。



ストーリーとは別日の違う山域でも、勇童はライディングパフォーマンスを優先してスノーシューを選択した。 / Yudo Yoshida



GEAR

MSR

ライトニング アッセント

Men's 22インチ モデル / サイズ: 20×56cm / 重量(ペア): 1.84kg / ¥55,000(税込)

ライトニングは、あらゆる地形に対応するMSRスノーシューを代表するシリーズです。外周を取り囲む板状の360°トラクションフレームと2本のクロスメンバーが優れたグリップ力と剛性を発揮し、丈夫でしなやかなデッキが地形に追従。急斜面の登りやスノーシューが苦手とするトラバース時にもしっかりと雪面を捉えます。また、軽量で耐久性があり、低温でも柔軟性に優れるウレタン製のパラゴンバインディングは、ブーツの種類を選ばず確実な固定力を誇りつつ、メッシュ面全体でブーツを包みこむことで足の甲への圧迫感を軽減します。ライトニングデッキとパラゴンバインディングを組み合わせたこの「ライトニング アッセント」は、スノーボーダーの使用率ナンバー1のフラッグシップモデルです。



MSR

ライトニング テイル

デッキの後ろに装着するMSRスノーシュー専用アクセサリー。
浮力が増すため、重い荷物を背負った時や、柔らかく深い雪をラッセルする時に有効。
スノーシューの適応範囲を広げます。

対応モデル: ライトニング アッセント(2012~)/ライトニング エクスプローラー/ライトニング アクシス
サイズ: 16×25cm / 重量(ペア): 268g
¥10,450(税込)



GEAR

MSR

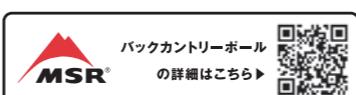
ダイナロック エクスプローラー ポール

サイズ: 105-140cm
収納サイズ: 63cm
重量(ペア): 552g
¥17,600(税込)

高強度の7075アルミニウムを使用した、非常にシンプルな構造の3セクションポールです。手入れがしやすいのが最大の魅力です。持ちやすいEVAグリップに加え、ポールを短く持った時に握りやすい拡張EVAグリップもあり、険しい冬のバックカントリーでの使用を想定した使いやすいモデルです。収納や長さを調整するためのダイナロックシステムは、道具を使うことなく、グローブをしたままでもダイヤルを簡単に回すことができるため、極寒環境で素手になることもありません。



ダイヤルを回すだけで調整可能なダイナロックシステム





STORY 03

スノーボード・ゾンビーズの 雪上キャンプ

テントを活用して行動範囲を広げた春トリップ

Photo & Text: Tsutomu Nakata

100リットルのパックに荷物を詰めて

過去に経験した車中泊は数知れず。時には厳冬期の雪山でキャンプもしてきた。ただただ雪に魅了されている僕たちは、ベストなコンディションでスノーボードするために、国内外問わずシュラフくるまってきた。

先シーズンの5月、ゾンビの様にしつこい僕らは中々シーズンを終えることができないでいた。ゲレンデもクローズし、日に日に滑れるエリアは生活圏内から遠ざかる。しかし、工夫さえすれば斜面に近づけてスノーボードを楽しむことはできる。そこで、MSRアンバサダーの中井孝治と旭岳の麓でガイド業を営む中川伸也がまとめ役となり、キャンプトリップを遂行したのだ。狙いは神奈川県と同等の面積を有する大雪山国立公園。厳冬期の大雪山東側エリアは、ほぼ人を寄せ付けない印象がある。麓の生活圏内から日々観察できない位置にあるからだ。国道が1本通っているだけでゲレンデもない。だから名のある山へ近づくためには、キャンプをするのが重要なファクターになる。雪が解け、林道を車で通れるようになる時期になってようやく介入できるといったところだ。

起伏に倒木、濁って深さの分からない大きな水溜まりが点在するワイルドな林道をしばらく進むと中川が車を停めた。壊れた橋があり、これ以上は車で入ることはできなかった。ここから歩いて入山する。背丈ほどに伸びた笹に覆われた獣道のようなトレールが1本、目指す山の方角へ延びている。各自100リットル前後のバックパックにテントやガストーブ、食材などの共有キャンプ道具を振り分け、冒険のスタート。久しぶりのキャンプ、バックパックの重さに失笑する。背負うまでにコツがいるのだ。まず、片方の膝にバックパックを持ち上げる。そしてショルダーハーネスに片腕を入れてひと呼吸。そのまま一気に回しこむ。ストラップの調整も必要だが、歩きながらベストな位置を見つけるのが良いだろう。ストラップが肩に食い込み始めたら、少し緩め改めて調節する。早く背中を軽くしたいというのが直近の願いになる。

1時間ほど歩いたか、再び中川が止まった。目の前からトレイルらしき道がなくなったのだ。どうやら登山道ではなく、何らかの作業道だったようだ。雪が残っていれば自由に歩けたが、雪解けは予想よりも早く、第一候補の山へのアプローチはここで途絶えた。だが自宅の札幌を早朝に出てここまで来たのだ。諦めたくない。

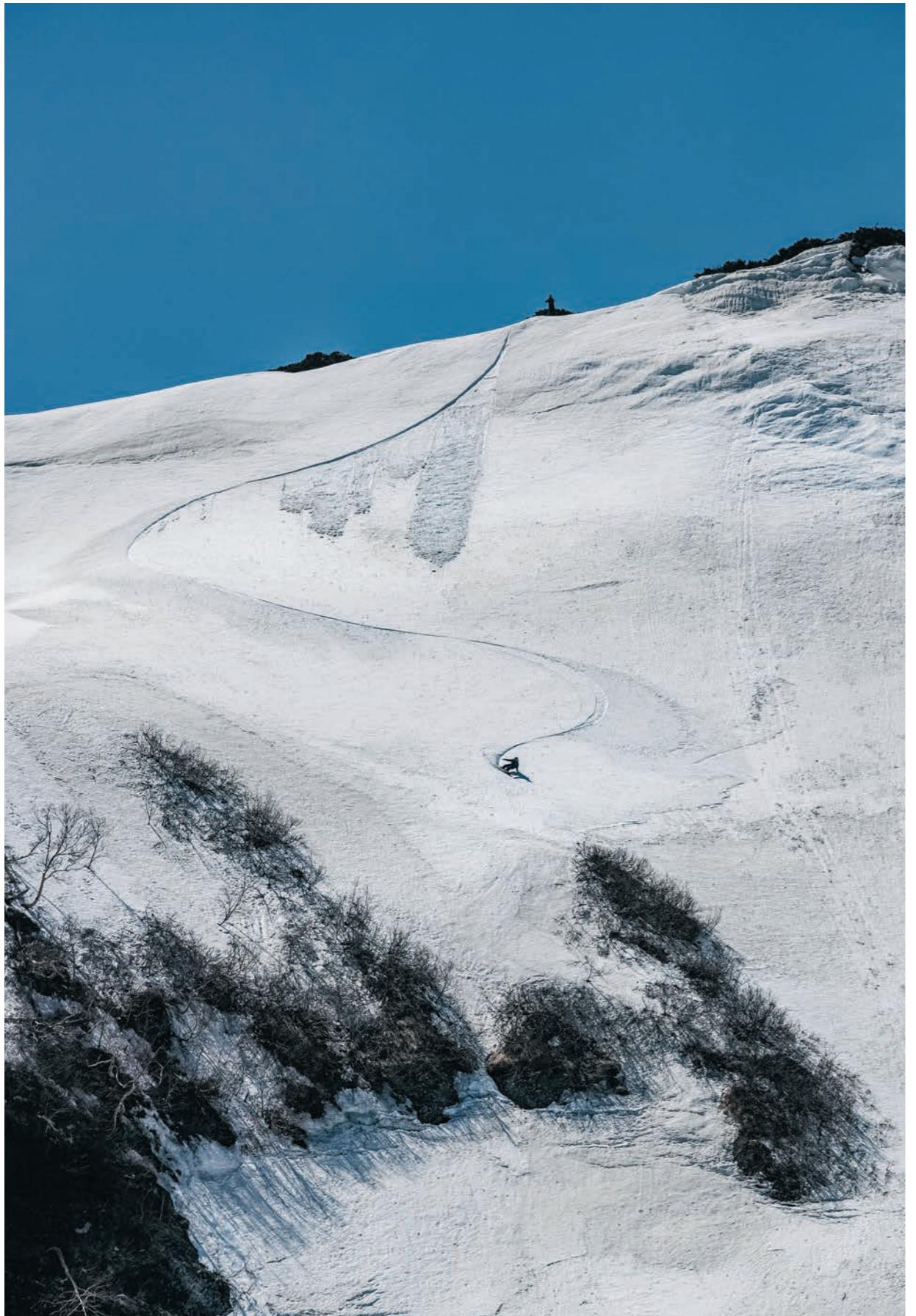
狙いの変更によって、すべてが行き当たりばったりのトリップに様変わり。途中の温泉街に立ち寄り、次の目的地に到着した頃には辺りは真っ暗になっていた。急いで幕営し夕食の支度を始める。過酷な天候にも耐えうる山岳テントだが、設営はシンプルだ。ギリギリ雪の残る場所に張り、食事は座りやすい芝生の上ですることに。料理長はいつも中川が担当してくれる。ウインドバーナーで湯を沸かしアルファ米に注ぐ。それを湯たんぽ代わりにしながら、ガソリンストーブにセットしたセラミックポットで煮込まれているスープカレーを待つ。まだ滑ることもできないのに、長い、長い1日だった。

翌朝、5時半。熟睡できたという中井は昨夜の残りのポットへ乾麺を入れラーメンをすすった。目指す斜面はテント場からも見えている。山の様子は札幌郊外よりも1ヶ月遅れといった状態で、木々はまだまだ裸だった。真冬なら朝日しか当たらない、好条件で雪が残る斜面。食後、僕らはスプリットボードを履いた。腰には熊よけスプレーをセット。この時期になると厳冬期とは違った危険性も出てくるが、なるべく移動時間を減らすためにフィールドにもう少し近づいてテントを張り直す。滑る斜面を観察できる時間があるということは、リスクマネージメントにもなる。そして、何よりも気持ちがいい。

そうして、やっと僕らは滑るべき斜面に向けてハイクを始めることができた。

中田撰：北海道出身・在住のフォトグラファー。札幌定山渓をベースにしながらも、冬の間に訪れる限られたベストな「その時」に「その場所」にいるフットワークを駆使し、道内を移動し続けている。





BACKPACKING CAMP GEAR

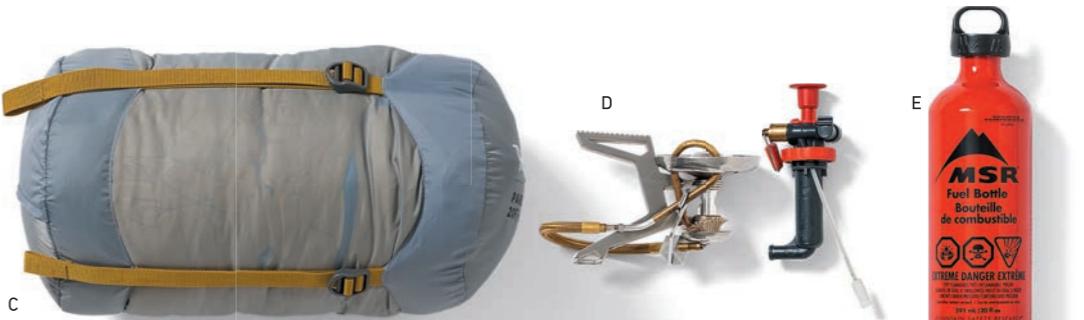
今回、アンバサダーの中井孝治さんがバックパックに詰めて運んだキャンプギア一式です。

燃料と調理道具は振り分けているので、すべてではありませんが、

コンパクトに収納できるMSRやサーマレストは、近場でも遠征でも冒険には欠かせないツールです。



A. [MSR / リモート2] 厳冬期の過酷な天候にも耐える山岳テントです。クロスさせたメインポールと、それに交差する台形型のポールによって、十分な居住スペースと強風や積雪に負けない高い強度を確保しています。かさばる冬用のギアも収容できる広い前室スペースを備え、複数日に渡るリモートエリア旅でも安心して使用できます。定員: 2人 / 総重量: 3160g / 収納サイズ: 51×17cm / ¥132,000(税込) B. [MSR / ウィンドバーナーパーソナルストーブシステム] 実質的に風の影響を受けず、ボットの底には効率良く熱を受けるヒートエクスチェンジャーを備えているため、驚くほど早くお湯を沸かすことができます。また外の環境に問わらず、一貫したパフォーマンスが得られます。1L の容量をもつ専用のボットに、バーナーヘッドとキャニスタークランプ、ガスカートリッジ(110)をまとめて収納できます(ガスカートリッジは別売り)。サイズ: 11.5×10.7×18.1cm / 重量: 465g (ガスカートリッジを除く) / ¥31,900(税込)



C. [THERM-A-REST / バーセック -18°C] 軽量かつコンパクトで保温性にも優れています、コンプレッションサックを使用することで、重くならずに簡単にバックに収めることができます。シェルに100%リサイクル素材を使用し、マットレスと一体化させるシナジーリンクコネクター、別売りのキルトやブランケットと繋げられるループを備えています。重量: 1090g / 収納サイズ: 20×23cm / ¥83,600(税込) D. [MSR / ウィスバーライトインターナショナル] ホワイトガソリン、無鉛ガソリン、灯油が使用できるモデル。火力が強く、静かな燃焼音が特徴です。軽量で、ゴトクを折りたためばコンパクトに収納できます。収納サイズ: 15×9×9cm / 重量: 316g (ストーブ+燃料ボンブ) / ¥22,000(税込) E. [MSR / 燃料ボトル 20oz] 新旧すべてのMSR 液体燃料ストーブに使用できるアルミ製の高品質な燃料ボトルです。¥3,740(税込)



F. [THERM-A-REST / ネオエアーサーモ(レギュラーサイズ)] 4枚のサーマキャプチャ層(熱反射板)が、地面からの冷気を防ぐと同時に体から出る熱を反射、細かく区切られたチューブの中に温かい空気を閉じ込める、ネオエアーシリーズで最も断熱性の高いマットレスです。重量: 430g / サイズ: 51×183cm / 収納サイズ: 23×10cm / ¥35,200(税込) G. [MSR / セラミック2ポットセット] 1.5Lと2.5Lのボットのセットです。内部には高温に強く、安全で耐久性に優れるフュージョンセラミックのノンステンレス加工を施しています。蓋には湯切り付き。マグカップやプレートをスタッキングすることもできます。蓋、TALON ポットハンドル付属。収納サイズ: 19.7×12.7cm / 重量: 457g / ¥15,400(税込) H. [MSR / イソプロ227] 燃焼効果が高く、高品質でクリーンな燃焼を実現するガスカートリッジです。容量: 227g / 重量: 370g / ¥935(税込)



TOPICS

D or T?

スノーショベルの雑学

Text: Yusuke Hirota



DかTとは、パートナーの下着の形の話ではなく、BCでパートナーの命を救うショベルのグリップ部分の話だ。1年前にこんな感じでSNSに投稿した記事は、炎上とまではいかないけれど、レジェンドライダーから学者さん、山岳警備隊のクルーまで様々なバックグラウンドのプレイヤーからコメントをもらった。皆さん、自分のグリップ形状には信念があるようで、譲れないという調子で書き込んでくれた。ちなみに私は、普段からDを使用していて、軽量化のためにショベルのブレード部分は小さくしても、柄の部分で軽量化を図ることはない。Dの良さは、小指にも

力が入り、ミングローブでも使用できること。デメリットはかさばることと、手が大きい人はグローブが入らないという難点がある。最近は、変形Tとかしなんてのも出ている。ちなみにUIAA国際山岳連盟が出している基準では、「DあるいはT、その他の形のグリップでも、シャフトに対して左右対称になっていることが望ましい」と書かれている。V字ショベル・レスキューの時に、右手でも左手でも使えるためだ。そういう意味で、購入の際は是非、実際にグローブをして確かめてほしい。命を救うギアだからこそ、慎重に選んでみてはどうだろうか。

広田勇介：スプリットボードの可能性を探る山岳ガイド。カナダでクレイグ・ケリー奨学金を受け、雪崩リスクマネジメントを学び、BC州のキャットスキーガイドサービス「BALDFACEロッジ」でガイド経験をつむ。現在は、カメラマンをしながら、のんびり里山滑りを楽しんでいる。



MSR オペレーター D ショベル

握りやすく、力が入れやすいD型ハンドルです。
サイズ: 最長88cm / 最短65.5cm
重量: 710g
¥12,100(税込)



MSR オペレーター T ショベル

コンパクト性を重視したT型ハンドルです。
サイズ: 最長84cm / 最短61.5cm
重量: 690g
¥12,100(税込)

耐久性が高く使いやすいため、ベースキャンプでの作業はもちろん、レスキューのようなスピードが求められる場面でも役に立ちます。素材に軽量な6000シリーズジュラルミンを使い、硬質アルマイト加工を施しました。ギザギザの先端が固い氷も砕き、背面がフラットなブレードは雪洞などを作る際にきれいな面出しに役立ちます。ブレードは雪面でストーブを置く際にも便利です。



TOPICS

Which one is best for YOU?

スリーピングバッグの比較

冬季のスリーピングバッグ選択は、使用環境や行動目的に合わせて選ぶべきです。例えば、厳冬期の北海道であっても車泊用であれば意外と使用可能な温度帯は増えますが、雪上キャンプや冬山登山となれば、当然、収納サイズからマットの選択も含めて話は変わってきます。ちなみに、前述したストーリー「スノーボード・ゾンビーズの雪上キャンプ」でのアンバサダー中井さんは、パーセックの-18℃を使用していました。春とはいえ、0℃にまで冷えた夜でもベースレイヤーのセットアップだけで寒くもなく熟睡できたそうです。加えて、サーマレストの特徴であるマットレスと一体化できるシナジーリンクコネクターの存在を絶賛していました。マットから落ちないだけで、冬の寝心地は大きく変わるようにです。さて、皆さんはどのような状況でスリーピングバッグを使用しますか？

THERM-A-REST ハイペリオン

優れたアウトドアギアに与えられる、米バックパッカー誌のエディターズチョイスも受賞したクラス最軽量級モデルです。中綿には900フィル・ニクワックス・ハイドロフォビックダウンを使用し、通常のダウンよりも3倍速く乾燥し、60倍長くロフトを維持します。またシナジーリンクコネクターでマットレスと一体化が可能です。



THERM-A-REST ハイペリオン -6°C

CONFORT:0°C / LIMIT:-6°C / RISK:-23°C
重量: 577g / 収納サイズ: 15×20cm
¥81,400(税込)



収納サイズは、同クラスの中でも驚くほどコンパクトになります。
※ここから更にコンプレッションが可能です。



THERM-A-REST パーセック -6°C

CONFORT:0°C / LIMIT:-6°C / RISK:-23°C
重量: 805g / 収納サイズ: 18×21cm
¥69,300(税込)



※ここから更にコンプレッションが可能です。



THERM-A-REST パーセック -18°C

CONFORT:-10°C / LIMIT:-18°C
重量: 1090g / 収納サイズ: 20×23cm
¥83,600(税込)



※ここから更にコンプレッションが可能です。



GEAR TOPICS



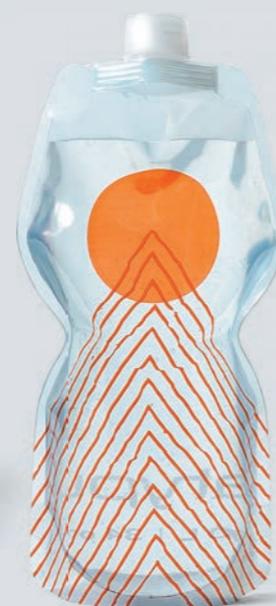
A



A MSR EVO
快適着脱
新しいバインディングへアップデート

着脱をより簡単にするバラグライド・バインディングへとアップデートした、比較的なだらかな地形を歩くに向いているエントリーモデルです。様々なシューズにフィットしやすい構造となっています。丈夫なユニボディツキが地形に追随し、グリップ力の高いトラクションレールが横ズレを防止してくれます。

サイズ:21×56cm / 重量(ペア):1.63kg
¥25,300(税込)



B



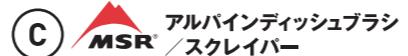
B ソフトボトル
冬のアクティビティには
別用途も!

アウトドア用の水筒として人気のソフトボトルですが、実はそれ以外の用途でも重宝されているのをご存知ですか？例えば雪上で怪我をした場合には雪を入れて氷嚢代わりに、テント泊で寒ければお湯を入れて湯たんぽ代わり（耐熱温度は90度）にと、丸めてパックに忍ばせるガイドさんも多いんですよ。

サイズ:15×28cm / 重量:24g / 容量:1.0L
¥1,540(税込)



C



**C アルパインディッシュブラシ
/スクレイパー**

雪山滑走者の必需品!?

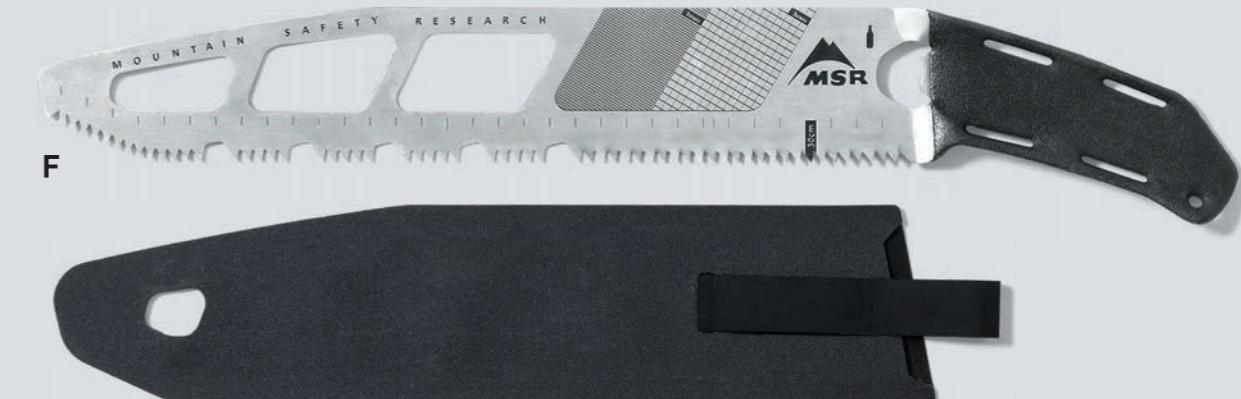
ハイクモードからライドモードへとチェンジする際、板やバインディングに付いた雪を払ったり、凍り付いたエッジやソールの氷を落とすのに便利だからという理由で、近年は多くの雪山滑走者に山行時の必需品として使用されています。もともとは少量の水でもキレイに洗える食器用のブラシ＆スクレイパーなんですが。

重量:22g
¥1,100(税込)

D



F



D MSR XGK EX
過酷なエクスペディションを支える
タフなストーブ

極地や寒冷高地など、世界中の過酷な状況で使用するために設計されたモデルです。様々な燃料に対応するマルチフュエルタイプで、頑丈なエンクロージャーと不純物が詰まりにくい太いフューエルラインによって環境問わず確実に燃焼します。前述した北アルプスのストーリーや、後述する南極遠征でも活躍した逸品です。

収納サイズ:17×10×9cm
重量:392g(ストーブ+燃料ボンブ)
使用可能燃料:
GXジェット(出荷時)／ホワイトガソリン・無鉛ガソリン・灯油
Xジェット(付属)／軽油(ディーゼル)・ジェット燃料
¥30,800(税込)



E 宇宙歯磨き
人にも地球にも優しい
デンタルケアアイテムが宇宙へ！

水がない山中や、吐き出すことが躊躇われる自然の中で、口腔をスッキリ清潔に保つことができるオーラルビースから、宇宙仕様の新製品が発売です。ケミカルフリー・植物成分100%・生分解性100%という本来の特徴に加え、「宇宙生活で付きやすい歯石を効果的に予防する」新たな課題をクリアしました。

内容量:80g
¥1,980(税込)

E



SPACE Tooth Paste



F MSR ベータソー
薄くて使い勝手のいい
スノーゾー

山岳ガイドや救助隊、スノーサイエンティストのためのスノーゾーです。丈夫なステンレスの刃は雪や氷はもちろん、木も簡単にカットできます。積雪状況を調べるピットチェックにも欠かせません。スキーバンド等でショベルのシャフトなどに繋げば、長さを延長することもできるので、少し離れた位置からの作業も可能です。

サイズ:47cm / 刃渡り:34.8cm / 重量:180g
¥10,450(税込)



STORY 04

人類未到のルートで南極点を目指した 冒険家・阿部雅龍の歩み

南極遠征を共にしたスリーピングバッグの真価

Photo: Masataisu Abe / Text: Backcountry Research



左上：強風によって削られたサスツルギ。高さ30cmほどでもソリには大敵だ。/ 右上：食事は高カロリーで高脂肪なものを用意し、バター200gをひとパック、ミックスナッツ、チョコ、サラミやフリースドライなどで1日7,000kcal近くを摂取。昼はこうして行動食を頼る。/ 左下：地形の凹凸と方向感覚を奪うホワイトアウト。/ 右下：砂の上を引いているようなドライスノーに苦戦した。



大和雪原にて白瀬隊に脱帽黙祷。南緯 80° 05.000' / 西経 156° 37.000'

白瀬ルートによる南極遠征の概要

冒険家の阿部雅龍さんがチャレンジした2度目の南極遠征はロマンに溢れている。氏と同じ秋田県出身の探検家、白瀬 翔（しらせ のぶ）が1912年に南極点を目指した夢を110年という年月を経て引き継ぐものだからだ。当時計画されていた「白瀬ルート」での現在における南極点到達は、行程の難易度に加え、出発点までのチャーター便に6000万円という莫大な資金が必要となることから、未だ誰ひとりとして達成どころか遠征の実現すらできていない。

そのスタート地点、白瀬によって命名された大和雪原（やまとゆきはら）に阿部さんが立ったのは、2021年11月19日のことだった。白瀬隊が海岸沿いから犬ゾリで辿り着き、撤退を決定した、360度見渡す限りに広がる大雪原だ。

「感慨深い瞬間でした。憧れていたレジェンド以来、100年以上誰も立つことのない、夢にまでみた場所に自分が立っている。そしてそこからの数百kmは人類が誰ひとりとして歩いていない所をひとりで歩くわけですから。それも多くの方からのご支援を頂いて、本当に、世界で一番の幸せ者だと思いましたね」

冒険家としての阿部さんの歩みは、すべて“単独・人力”という条件によるものだった。経歴の一部を時間軸で抜粋すると、自転車での南米大陸縦断（10,924km）、米国コンチネンタル・ディバイド・トレイル踏破（4,200km）、アマゾン川のいかだ下り（2,000km）、そして幾度かの北極圏徒歩の経験を経て、2019年に日本人初踏破となるメスナールートでの南極点到達（918km）などがあるが、実はこれらすべてが今回の白瀬ルートへの伏線であり、大冒険にチャレンジするためのキャリア形成に要した路だった。わずか数十cmの一歩をひたむきに重ね、壁となる数多の障害も乗り越えてきたからこそ到達した大和雪原。その感動の深さを他者が計ることなど不可能だろう。

そしてそこから、130kgのソリを引く単独無補給、南極点へ向けたおよそ1,200kmに及ぶ本当の冒険が始まった。白い地平線が続く景色の中を歩き続ける阿部さんは、大方6時に起きて8時から自身で決めた時間、今回の遠征であれば10～12時間ほどを徒步行動したそうだ。風が強く吹けば体感で-30℃まで冷え込み、快晴無風なら-6℃まで暖まる。雪質も様々で、吹き溜まれば深い場面だってある。もっとも手強かった

のは、柔らかいけど冷えている雪だそうだ。表面が乾燥してソリが滑らない状況を、まるで砂の上で引っ張っているようだと比喩した。

そうした様々な状況の変化に進める距離は大きく左右されたが、これまで同様に一歩一歩を前へ踏み出し続けた。しかし、歩き始めて54日目、最大の難関であろう南極横断山脈越えの麓までの780kmを歩いた時点で、ベースキャンプとの協議のうえ冒険の中止を決定した。

実はスタート前からコロナの影響でベースキャンプ自体の設営が遅れ、ルート上に存在する大きなクレバス迂回によって100km以上も距離が伸びていた。最初から時間と距離の計算が合わない状態を強いられていたが、南極点ピックアップのタイムリミットは変わらない。

「規模の大きい遠征は精神戦ですね。今回はスタートから厳しい状況に直面して非常に苦しかったんですが、何が起こるか分からないのが冒険であって、それを納得したうえで自分で決断しているわけですから、言い訳にはなりません。それでも、山脈を越えた先の南極点に到達し、子どもの頃からの夢が叶った時に

自分は何を感じるのか、何が見えるのか、それを知りたいから、諦めずにもう一度行ってこようと思います」

この11月、阿部さんは再び中断した今プロジェクトを続けるべく、横断山脈の麓からリスタートを切る。フラットを歩き続けた今回とは違い、悪魔の舞踏場と称されるクレバス多発地帯へ向けて3,200mまで一気に標高を上げる困難なルートへと入る。その計画を前のめりに語る阿部さんは、まるで小学生のように眼を輝かせていた。

ご本人による冒険記はコチラ▶
「プロ冒険家・阿部雅龍
Beyond the Legend」



阿部雅龍：1982年生まれ。秋田県出身。秋田大学在学中から冒険活動を開始。普段は資金稼ぎとトレーニングを兼ねて浅草で人力車業を営む。今回の徒步による南極点到達を目指したプロジェクトの後、第26回椿村直己冒険賞を受賞。

**「冒險家が
本当に求める物を商品化する
チャレンジ精神のような
ものを感じます」**

サーマレストの寝袋「ポーラーレンジャー」は、コロラドの極地冒険家エリック・ラーセンが開発に携わっています。阿部さんは彼に会ったことがあるそうですね。

最初の南極遠征の前なので4年ほど前です。彼が主宰する極地トレーニングに参加したんです。厳冬期のカナダで凍結したウイニベグ湖上を歩きました。

すでに北極圏を何度も単独徒歩した経験のある阿部さんがなぜ参加を?

実は南極でのソロは簡単に許可が下りるものではないんです。多国間条約によって安全面が守られているので。実際に当時の自分の経験だけではチャーターする飛行機会社からの信頼を得ることは難しく、そのためにエリックに自分の思考や能力を認めてもらう必要があった、というのが実際のところです。もちろん、彼を世界最高峰の極地冒険家と捉えていたので、習うのであれば自分の思うトップの人からという思いもありました。

彼とのトレーニングから得られたものとは?

精神面が大きいです。常にユーモアを大切にしていて、周りを笑わせ皆に気配りをするんです。過酷な環境下であっても、そうした精神性の高さを持ちあわせることの重要性を強く感じました。そしてもうひとつは、南極でチャーター便を飛ばす会社への推薦ですね(笑)。

「ポーラーレンジャー」に触れたのもそのタイミングですか?

存在は以前から知っていたんですが、実物を見たのはその時が初めてでした。MSRやサーマレストには、よくこんな物を実現化するなという製品がいくつかありますよね。ポーラーレンジャーもまさにそれです。冒険家が本当に求める物を商品化するチャレンジ精神のようなものを感じました。おそらく、すごく過酷な状況で使用し続けなければ、この寝袋がどれほど優れているかのディテール一つひとつを理解することは難しいんじゃないでしょうか。

2度の南極遠征での使用で優れていると感じたポイントを教えてください。

まずは表記されている温度帯が非常に厳格ということです。本当にその通りだと体感しています。そのうえこの温度帯にしては軽いですよね。そもそもっとも優れていると感じているのが、ダウンに施されたニクワックスの能力の高さです。ハードに使い続けていますけど、ロフトが下がりにくいんです。他にもいろいろあるんですが、挙げたらキリがないですよ。(※その他のレコメンドは次ページにて)

今回の南極遠征で眠りを妨げる要因はありましたか?

寒さは問題ありません。あるとすれば不安ですね。やはり心が健全でないと眠れない。南極は動物がいませんからその心配は無いんですが、怖いのはヒドゥンクレバスの存在です。そこに落ちてしまう夢を見たりしますから。でも今回では突きつけられた時間的な厳しさがメンタルに影響しましたね。

それでも折れずに前へ進む原動力とは?

究極的には自分のためです。何のためにここに来たのか。もし失敗したとしても、やれる限りのことをしないと後悔するでしょう。憧れてきた冒険家ならどうするだろう? と考えると、やはり前へ進むだろうと思うんです。だから自分もそうありたい。それだけですね。



GEAR**THERM-A-REST****ポーラーレンジャー**

推奨する温度範囲
CONFORT / -20°C, LIMIT / -30°C
重量:1477g
収納サイズ:22×25cm
¥115,500(税込)

極地冒険家のために作られたこのモデルは、冒険家の生の意見を取り入れた特別なモデルです。中綿に800フィル・ニクワックス・ハイドロフォビックダウンを使用。足元にはTOE-ASIS フットウォーマーを採用し足の冷えを防ぎます。サイドベントは温度の調整だけではなく、スリーピングバッグから出ることなく腕だけを出し作業することができます。サイドベント裏にはフラップがあるので外気の侵入を許しません。また、特別に設計されたシュノーケルフードは呼気による凍結を防ぎます。2022年はシェルに100%リサイクル素材を使用し環境に優しい商品になりました。ストレージサックとコンプレッション・スタッフサックが付属。



THERMAREST
スリーピングバッグの詳細はこちら▶

**シナジーリング・コネクター**

これのおかげでマットとちゃんと連結できるのでズレることが無いです。ズレてしまうと、背中に冷えを感じたり、そこだけ結露が起こることもあるんですが、そうならないように気遣った構造ですね。

**シュノーケルフード**

目を出すことを前提としていない。口だけですね。その部分だけを化織にしているから乾きやすいし、呼気で凍結することも無い。非常にありがたいポイントです。さらに首周りを留めるボタンを金属以外にしている点も素晴らしい。もし金属だったら顔に当たって凍傷になることがあるんです。

**センタージッパー**

暑い時はフロントを開けた方が熱を逃がしやすいからこれが理想です。反対にジッパー裏側の肉厚なドラフトチューブと膝下あたりまでのジッパー位置が、熱の逃げを抑えてくれています。

**シリエット**

足元のダウン量が多いとの、膝あたりから少し細くなっているために熱が逃げることを抑えてくれています。足の寒さが寝袋のトラブルに多いですが、それが無い。

**サイドベント**

寒い環境下でも手だけを出すことは助かります。いちいち寝袋から出なくていいのは大きいですね。ジッパー裏は肉厚なドラフトチューブがあるので放熱も少なく感じます。

**TOE-ASIS フットウォーマー**

中に足を突っ込むことのできる断熱材のスペースがあるんですが、これが本当に足先を温めてくれます。自分は-30℃でも薄い靴下だけで十分でした。

Commented by Masatatsu Abe